

■特集 占領下・戦後の演劇運動

雄弁な「沈黙」

——植民地主義批判としての安部公房「友達」論

岩本知恵

はじめに——過去に対する沈黙と「消しゴムで書く」こと

安部公房は四度、自筆年譜を著している。一九六〇年、『新鋭文学叢書』に寄せて書かれた年譜をはじめ、一九六四年、六五年、そして六六年に書かれた各年譜を眺めてみると、徐々にその分量が減っていることに気が付く。⁽¹⁾一九六〇年の年譜では編年体で記されていた安部自身の経歴は、六四年の年譜では大きく縮小され、「出版社のたつての希望により、以下私を知るためにはいささかも役立ちえないだろう伝記をあえて書くことにする」の文言の後、ごく簡潔に綴られるに過ぎない。その後のほとんどの記述は箇条書きの作品年譜で占められる。六五年の年譜も事情は同じである。六六年の年譜に至っては、自身の経歴に関する情報はほとんど削除される。代わりに、ごく短い文章が冒頭に挿入される。

ぼくは東京で生れ、旧満州で育った。しかし原籍は北海道であり、そこでも数年の生活経験を持つている。つまり、出生地、出身地、原籍の三つが、それぞれがついているわけだ。おかげで略歴の書き出しが、たいそうむづかしい。ただ、本質的に、故郷を持たない人間だということは言えると思う。ぼくの感情の底に流れている、一種の故郷憎悪も、あんがいこうした背景によっているのかもしれない。定着を価値づける、あらゆるものが、ぼくを傷つける。⁽²⁾

一九六六年二月一五日発刊の『われらの文学』にこの「略年譜」が掲載される少し前、安部はのちに「消しゴムで書く」と題される無題のエッセイを綴っている。鳥羽耕史によると、このエッセイは、「演劇のパンフレットのための「自己解説」を書くことを求められた」安部が代わりに寄せたものらしい。⁽³⁾「だから、ぼくはこの自己解説のためのページを、出来ることなら、

消しゴムをつかって書きたかった。過去にさかのぼって、作品の軌跡以外の一切を消し去ってしまった、極上の消しゴムをつかって書きたかった」と述べる安部のこのエッセイを読み解き、鳥羽は「公房には、作品の軌跡のみが自己の軌跡であるという強い信念があった。「生活の作品化」をする私小説を嫌い、作品は生活からは切り離されて書かれ、読まれるべきだと考えていた」と指摘する。⁴

こうした指摘を踏まえて年譜の変遷を眺めていくと、確かにそこには自身の経歴の痕跡を限りなく薄くしようとする安部の姿が見えてくる。その上で注目したいのは、この年譜から様々な記載が消去されていく時期が、安部の「転向」の時期と重なっているように見えることである。

安部の作風や政治的立場は、一九五〇年代から六〇年代にかけて大きく変化したというのが定説である。六〇年代はいわば過渡期として位置付けられる。この「転向」は様々な角度、様々な観点から説明されようとしてきたが、とりわけ、東欧旅行を経た安部の認識の変化と共産党批判、そして共産党からの除名処分を分水嶺に語られることが多い。一九五六年にチェコ・スロバキア作家同盟大会に参加し東欧を周遊した安部は、帰国後、日本共産党を批判するエッセイを発表する。⁵ その後も共産党を度々批判した安部は、一九六二年二月、党から除名処分を受けるに至る。こうした「転向」は、その後の演劇への傾倒をも準備したと論じられる。木村陽子は小説家でありラジオドラマや

映画でも成功したマルチメディア作家安部が、「七〇年以降の〈演劇・小説二極化時代〉」へ移行した要因の一つとして、左翼作家としての意識から自由になり「大衆の意識改造や量的支持も、もはや主たる関心事ではなくなつて」いったことを挙げている。⁶ その後の安部の作家イメージは、「無国籍性」「国際性」と強く結びつき、国や地域に囚われない普遍的で世界的な作風が評価されるようになる。言い換えれば、一九五〇年代と六〇年代に分断線を引いた上で、六〇年代以降の無国籍的な作家イメージを肯定的に評価し敷衍する形で研究が進んできたのだ。⁷

このように「転向」を経た安部のイメージが、今日の安部の強固な作家イメージを形作っていることを考えた時、安部の「転向」は成功したと言えるのかもしれない。

加えて鳥羽は、かつての作品の加筆修正が、「転向」の時期に重なるようにして盛んに行われたということを指摘する。⁸ 自身の友人の墓標として記した作品『終わりし道の標べに』の大幅な改稿に顕著だが、安部はここでも、かつての自分の経歴や痕跡を消していく。「転向」という定説を前提にすれば、安部は自ら望んで、過去の痕跡を消し去ろうとし、それに成功したということになるだろう。無国籍的な作家イメージは、安部が批評家と共犯的に作り上げたものだという考え方もできる。初期の作品を書き換え、またはリテラリー・アダプテーションの中で改作するという作業を通して、安部は自身の過去を書き換えようとしたのかもしれない。

しかし、本当にそうだろうか。

このような安部の作家イメージに対して、坂堅太は、一九六〇年代以降の安部の無国籍イメージを安部作品全体に敷衍することを批判し、一九五〇年代安部のナシヨナリズム性を明らかにしてきた。⁽¹⁰⁾それは同時に、一九六〇年代以降の安部の無国籍イメージが、脱政治化／脱文脈化として解釈されてきたことを批判的に暴くことでもあった。「転向」によって達成されたかに見える経歴の希薄化と、それによる普遍性の獲得は、決して肯定的にのみ語られていいことではないのである。また、鳥羽が「彼の消しゴムの手際の鮮やかさは、消されたものの復元によってしか見え」ないと言いながら、安部の伝記的事項と作品を結び付けていく作業を行うのも、こうした問題意識ゆえだろう。⁽¹¹⁾

こうした先行研究の指摘を受けて、本稿が試みたいのは、年譜からの経歴に関する記述の激減、および「消しゴムで書く」ことが持つ意義を、安部の極めて政治的な態度として再文脈化することである。経歴について語らないことを、作家と作品の切り離しを望む態度の現れとして理解することを保留し、無国籍で普遍的な作家イメージの獲得へと短絡させずに意味づけることが、ここでの目的である。議論を先取りすれば、「転向」を脱政治化せず、沈黙それ自体の意味を植民地主義批判の地平に置き直して見る必要があるのではないかと考えている。

このことを考えるにあたって、本稿では、安部のリテラ

リー・アダプテーションの代表例ともいえる「闖入者」(『新潮』一九五一年一月)から「友達」(『文芸』一九六七年三月)への変遷を取り上げる。「闖入者」は同時代においてアメリカ軍を占領軍と位置付ける安部の政治的立場の表明として読解されてきたが、戯曲化され「友達」として書き換えられた際には同質性による共同体形成への批判を表した作品として評価されていく。同質性による共同体への批判は、すなわち無国籍性や普遍性の標榜、あるいは個人主義の称揚へと読みかえられ、ややもすれば安部の過去の経歴に対する寡黙な態度を脱政治化であり脱文脈化であるとする理解に短絡的に結び付けられてしまうだろう。それは安部のナシヨナリズム批判を形骸化し骨抜きにする危険をはらんでいる。「友達」の持つ批判性を再検討し意義づけることによって、安部の植民地主義批判およびナシヨナリズム批判の核心を明らかにし、安部の沈黙の意味を明らかにしたい。

一、引揚者／植民者としての選択的沈黙

「闖入者」および「友達」の分析に入る前に、多少遠回りにはなるが、まずは、安部の年譜の記載に戻り、安部の減っていく口数、消されていく経歴とは一体何なのかを確認するところから始めたい。ここで本稿が年譜の描写にこだわるのは、安部が年を追うごとにその記述を削り、最後には丸ごと書かなくなった／書けなくなった経歴が、引揚者であり植民者二世とし

ての経験についてだからである。

六〇年の段階で記載されていた伝記事項を確認すると、そこには東京で生まれ満州に移り、そして敗戦を迎えて引揚げに至るまでが簡潔ながら詳細に記載されている。「五族協和という偽スローガンを、私は心から信じきって」いたと反省的に述べる安部は、おそらくこの時点で既に自身の植民地二世としての加害性に自覚的である。

実は安部は、五四年の時点で既に、満州についての思い出を抑制的に語りながら、「植民地を故郷だということは絶対にできない」と断言している。

さて、はじめに書いた、瀋陽を出身地だと割り切ってしまったという理由であるが、簡単に言うくと、われわれ日本人はそこで植民地の支配民族として暮らしていたのだということである。私の意識にはそういうものはほとんどなかった。しかし現実と意識とは別である。支配民族の特徴は（中略）その土地の人間を人間としてよりも、植物や風景のように見るといことだ。つまり土地の人間は風物の一部なのである。よほどながく暮らしても、この事情はなかなか変わらない。これは相手を見失うばかりでなく、同時に自分をも見失っているのだが、その点にはめったに気づくこととしないものだから、やつかいだ。植民地を故郷だということとは絶対にできないことである。⁽¹²⁾

こうした記述からも確認できる通り、安部は植民者としての自らの立場を積極的に引き受け、自省的に振舞っている。それは、植民地において植民者である自分が圧倒的な特権性を持つて存在していたことへの自覚ゆえであり、植民者であることと構造的な差別への加担とが切り離せないためである。

安部と同じく、故郷を喪失したことを語る作家に小林勝がいる。植民地二世として朝鮮半島で育った彼は、生涯を通じて自身の植民者性に向き合い続け、その加害性ゆえに、朝鮮に対する懐かしさを拒否することを宣言する。⁽¹³⁾小林が言う故郷の喪失は単なる事後的な出来事ではない。彼の作品「フールド・一九二七年」(『新日本文学』一九五六年五月)に描かれるのは、最初からその地にとつて部外者であった自身の姿の発見である。これは安部の言う「その土地の人間を人間としてよりも、植物や風景のように見る」ために「同時に自分をも見失っている」事態と響き合う。原佑介は、小林勝が描こうとしたものが、植民地朝鮮における日本人と朝鮮人の出会いなどではなく「出会い損ない」であつたと指摘するが、この言及を援用すれば、安部の自省的な語りは、被植民者と出会えなかった「日本人」である自身の加害性を浮き彫りにする営為であると位置づけられるだろう。

しかしそれは逆説的に、自らの強固な「日本人」性に依拠することによって可能な振る舞いでもあつた。

五〇年代安部のナショナリズム性を暴き出す坂の研究は、こうした「植民地という過去の責任を受け止めるために、否定性」として背負わざるを得ない「支配者＝日本人」としての意識」が、戦後アメリカからの独立を達成するために必要とされた「被支配者＝日本人」としての民族主義性と癒着してしまっていたことを指摘している。そしてそれゆえ、東欧旅行を経た安部はその誤謬に気が付き、同質性批判という観点から共産党を批判していくのだと説明される。

一九六〇年代以降、確かに安部はナショナリズム批判を展開していくが、「隣人思想」の批判からも明らかのように、そこで標的とされているのは同質性を基盤としていたナショナリズムである。安部は日本国民という共同体そのものの存在を否定していたわけではなく（支配の過去を引き受けようとする限り、それは不可能だ）、ただ従来のものとは異なる共同性の在り方を構想していたが故に、旧来の「国民」概念に対する批判がなされたのである。¹⁵

加害者性としてのナショナリズムを確保するこの指摘を通して見ると、安部のポジショニングは見えやすい。特に、同質性批判がニュートラルで空虚な無国籍性を標榜するものではなく、植民者性の免罪として提示されることがなかったという指摘は非常に重要だろう。

だが一方で、それは安部の沈黙を説明しない。もし安部が加害者ナショナリズムを持ちつづけていたのだとするなら、これまでの雄弁さを保ち続け、自筆年譜においても自らの植民者としての加害性を語り続けていたと考えられるからだ。しかし彼がナショナリズム批判に至ることで加害者性から自由になれたとも思えない。同質性を醸成する伝統や民族を否定した先に、楽観的な観念として無国籍性や普遍性を信じることができたなら、自らの加害者性からも自由になり、安部はやはり雄弁であつただろう。

安部が支配の過去と加害者性の問題を引き受けねばならないこと、そしてそれを引き受けようとしたであろうということは、むしろ確かである。しかし、同質性を批判しながら加害者性としてのナショナリズムの位置を確保しようという在り方は、それが倫理的に重要な態度であると同時に、論理的に矛盾をはらむものでもある。安部はこうした切り分けを、当たり前に論理化して提示できたのだろうか。加害者性としてのナショナリズムを引き受けながら、同質性を機軸にしたナショナリズムだけを否定するというのは、言葉以上に困難な態度であり振る舞いであつたに違いない。逆説的に、その困難さを思う時、安部の沈黙の意味は見えやすくなる。

「日本人」としての加害性を軸に語ることの困難に直面した安部は、徐々に自らの経歴についての記述に葛藤するようになる。しかし、同質性を批判しナショナリズムを批判する態度は、

けつして樂觀的な無国籍性や免罪に結び付くものではない。植民地を故郷と呼んではならないという自制は生き続けている。

「原籍と、出生地と、育った場所とが、三つとも違っていることのために、その後私はますます過去に関して口が重くなつた」¹⁶。安部は、被植民地に対しては自らの加害的立場を引き受けねばならないという自戒と、それがナショナリスティックな民族的同質性を立ち上げるものであつてはならないという要請との間で引き裂かれていたに違いない。こうした中でとられたのが経歴の削除であり沈黙なのではないか。これを選択的な沈黙として、あえて意味づけてみよう。

ここに至つて消しゴムで書くという意味が、別の意味合いで浮上してくる。それは沈黙と削除、時には加筆修正によつて、より雄弁に語ろうとする態度である。いや、むしろ、どうにかして語ろうとした時に選択されたのが、自己表象を削り取つていく作業であつたという方が適切であるかもしれない。

前述した通り、安部は一九六〇年代前後、多くの初期作品の加筆修正を行い、また、六〇年代後半にかけて自身の伝記的事項について口を閉ざしていく。しかしそれは決して、脱政治的で脱文脈的な作品提示を望む態度ではありえない。むしろ極めて政治的な態度であつたと言えるだろう。しかもそれは、樂觀的な無国籍性や、漂白されたコスモポリタン性とは真逆の、地域性と歴史性に縛り付けられた、植民地主義問題に深く食い込む態度であつたのだ。

二、「闖入者」から「友達」へ

ここにおいて「闖入者」から「友達」への変遷を検討する意義が明確になる。この二作は明らかに、植民地主義の問題を題材に描かれた作品だからだ。

六六年にごく短い略年譜と「消しゴムで書く」を発表した安部は、「闖入者」を戯曲として書き換え「友達」として発表する。いわゆる「リテラリー・アダプテーション」である。「友達」を『文芸』に発表した際、安部は「作者附記」において「テーマも、プロットも、まったくちがっている」と説明を入れる。「もし、脚色と原作が同一人でなかったら、二人は生涯、許し合えない敵になつてしまふだろう。私が、私自身であつたことに感謝する」¹⁷という言葉通り、「闖入者」と「友達」の二作は、類似点こそ多いものの、小説から戯曲への変更のみならず、まったくの別作品と言つてもいいような多くの変更が存在している。むろん五〇年代後半から六〇年代にかけて、初期作品へは多くの加筆修正が行われてはいる。しかし、作品のテーマや時期という観点からも安部自身の言及から考えても、略年譜からの大幅な経歴削除と「消しゴムで書く」ことの意義を植民地主義批判の文脈から検討するにあつて、「闖入者」と「友達」の關係ほど適切な対象はないだろう。

さて、「闖入者」と「友達」は共に、ある一人の男の部屋に、大人数の「家族」が「闖入」してくる物語である。大家族に闖入された主人公の男は、彼らに搾取され最終的に死に至るのだが、これは植民地主義における占領の問題を描いていると捉えて差し支えないだろう。「闖入者」と「友達」の大きな相違点は、闖入者家族の態度と闖入を正当化する論理である。「闖入者」においては暴力的であった家族は「友達」においては融和的になり、直接的な暴力は隠蔽されるようになる。また「闖入者」においては「民主主義」を大義名分にした多数決Ⅱ数の暴力が、闖入者家族の論理であったが、「友達」における家族は多数決をも暴力の一種に過ぎないと述べ、一貫して非暴力と愛、連帯や協調をその行動原理に据えているように見える。

「闖入者」における「民主主義」（もちろんこれは「民主主義」の名を騙った全体主義であって、民主主義ではないのだが）の強要は、当時のGHQ支配の時代状況の中で、アメリカと日本の関係の寓意として読解されることが多かった。山田博光は、ソ連のコミンフォルム批判を受けて分裂する日本共産党の五〇年代問題と引き付けて、アメリカ軍を占領軍と認定する安部の態度を読み取る¹⁸。また、黒井千次は、情勢から考えて同時代の読者が「闖入者」に占領軍の寓意を見ることは幾分自然なことであったと振り返る¹⁹。しかし、こうした読みが「日本国民」という幻想の共同体に過ぎないものを自明視する態度を醸成してしまうのも事実である。

こういったモチーフから変形・発展した「友達」は、同質性による共同体原理を批判的に描いていると論じられることが多い。石沢秀二はその抽象性を評価しながら「闖入者」から「友達」への変化の核心を「家族」意識に根をはやす共同体原理の問題であると指摘する。それは、「日本の共同体原理の根底にかかわる『母性』とか『故郷』の問題」であり、石沢は「友達」に、同質性を基盤にする国民国家批判が内在していることを明らかにしていく²⁰。小説「闖入者」を発端にした様々なアダプテーションの意義を論じる友田義行は、「闖入者」から「友達」への変遷を、同時代における「紀元節の復活」と「明治百年」に象徴される共同体原理の脅威に対する警鐘として読解する。こうした分析は、「闖入者」が同時代の制約の中で持った読解傾向——アメリカ軍に相対する被支配者としての日本国民の立ち上げを批判的に修正するものとして「友達」を位置付けるものである。友田は、親しげな態度を装いながら侵略してくる「友達」における家族に、五族協和の欺瞞を体現した帝国日本のアナローグを読み取る。「かつて支配者側の国民として満州で育」った安部が、むしろ歴史的には闖入者側であったことを読み取るこの分析は、「闖入者」から「友達」への転換を、「転向」および選択的な沈黙の時期と重ね合わせて読む際に重要な視座を与えてくれる。確かにここには、「日本人」として植民者であった自らの加害性の問題を引き受けつつ、そこに存在した同質性を基礎とする共同体原理の批判が読み取れるのだ。

しかし一方で、「闖入者」をGHQ占領下日本のメタファーとして単純化して読むことができないのも事実である。内藤由直は、「日本国民」なる概念を自明視する「闖入者」読解の問題性を丁寧に洗い出し、「アメリカ軍の占領下で抑圧・支配されている主体を、特定の共同体として一律に把握することは困難」であると述べ、「五〇年代前半に文学と政治の双方の領域で企てられたのは『非日本人』を疎外し、民族や国籍に基づいた『純粋日本人』のみの主体あるいは共同性を創造的に構築することであり、『こうした五〇年代前半における国民化の歴史を等閑に付したまま、『闖入者』に描き出される抵抗主体を『日本人』や『日本国民』と把握すること』を批判する。その上で内藤が試みるのは、「闖入者」を「グローバル化時代の新たな植民地主義を描き出す小説」として読解することである。⁽²²⁾

内藤の試みは、テクスト論的に安部の意図を離れて「闖入者」の読みの可能性を拓く野心的なものであるが、「闖入者」の内容を改めて確認してみても、「民主主義」の名を騙る全体主義とその体現者としての闖入者家族を、単純な占領軍／アメリカのメタファーであるとは断言しにくい。闖入者家族の特質は、アメリカ軍的であると同時に、当時の日本政府や共産党の特徴とも合致する。⁽²³⁾ しかも安部は後に「闖入者」について、「誤解された民主主義、もしくは多数という大義名分の機械的拡大解釈に対する、諷刺」であると述べ「自由に対するアメリカ的神話、もしくは、保守政党の巧妙な多数原理の煙幕の利用、そし

て、奇しくもそれらとメダルの裏表のように一致している、左翼政党の偽似多数原理」への批判であったと、その批判のレンジの広さを示している。⁽²⁴⁾ 民族主義的な抵抗主体を立ち上げることでアメリカの占領に反抗しようとした当時の共産党の在り方を、闖入者家族に投影して読むことができる可能性が提示されているのである。

このように見た時に、「友達」において尖鋭化したとされる同質性による共同体批判は、実は「闖入者」の時点から内在していたということがわかってくる。むしろ、安部は「友達」のテーマについては「疑似共同体のシンボル（明治百年、紀元節の復活等々）に対する、われわれの内部の弱さと盲点」を暴くことであると述べているのだから、それ自体を否定することはできないだろう。あるいは、読者や観者の受容の方向性をコントロールする観点から、「闖入者」時点で内在していた問題を取り出してわかりやすく前景化したのが「友達」とあるという言い方もできるかもしれない。

しかし、あえて本稿はここで、「友達」におけるテーマ、「疑似共同体のシンボル」への「弱さと盲点」を、「闖入者」にも内在していた同質性批判とは別の次元で描いた作品として検討してみたい。この試みは、「闖入者」時点では「日本国民」というナショナルスティックな共同体を信じていた安部が、「転向」を経て、共同体原理としての国民国家主義を批判していくという物語について、あえて検討を加えるということになるだ

ろう。それはいわば、加害者ナショナリズムを保ちながらも、ナショナリズムや植民地主義を批判せねばならないという相反する要請の中で描かれた問題のその内部に分け入っていくことである。ナショナリズムはどうあっても、排除と包摂の構造によって搾取の暴力性を持つてしまう。ナショナリズムによらない加害の問題の言語化は、非常に困難ながら、差し迫った課題であつたに違いない。言い換えれば、本稿の試みは、同質性による共同体を批判するだけではなく、その困難と問題点を具体的に探った実践として、「友達」を読解することである。

三、自由と自律の裏面としての「家族」

こうした観点から「闖入者」と「友達」の相違点を眺め直した時に、本稿が着目するのは、家族の描かれ方の変化である。「友達」における家族は、家父長制的側面が強調され、型にはまったジェンダー規範と性別役割分担が強調されて描かれているのだ。

むろん「闖入者」の家族が家父長制的でなかったわけではない。「闖入者」家族において実質的な発言権を有しているのは皆男性であり、女たちは従属的な印象と役割を強調されていた。「闖入者」家族は、わかりやすく男尊女卑的で封建的な家族である。しかし「闖入者」においては戯画化され記号化されていたために、それがむしろ滑稽な皮肉としての提示であることが

わかりやすい。また、圧倒的な搾取対象として主人公の男が置かれているために、家族内部の非対称性は後景化されている。

一方「友達」の家族は、その家父長制的な描写が、自然な家族像として素通りできてしまうほど具体化されている。翻つてそれは現実的な家父長制的家族の描写となり、その内部にあるジェンダー規範と非対称性が見えやすくなる。家族内部においては同質性よりもむしろ差異の強調が行われているのだ。そして、その内部に取り込まれる主人公の男も、その性別役割分業の規範に編入される。「闖入者」において圧倒的弱者、完全なる搾取対象であつた主人公の位相は、「友達」において変化する。

こういった主人公の描写は、一見すれば作品の持つミソジニー性の表出として読解可能かもしれない。北村紗衣は岡田利規演出の「友達」を批評する中で、作品に潜んでいるミソジニー性が演出によって表面化する危険性を論じ、「主人公の男の後ろには母親的な権力を背負った女たちに象徴される「家庭」の影がちらついて」おり、「家庭という共同生活を求める女に脅威を感じている女嫌いな男の物語という側面をも有しているのではないか」と述べている。⁽²⁶⁾

こうした読みが可能になるのも、「友達」における主人公の男が、家族の中に、あくまで家族として取り込まれるためである。家父長制的ジェンダー規範の中で、家庭の中の男性的な役割を押し付けられる主人公に求められるのは、外で働いて賃金を稼ぎ、それを家庭に入れることのみである。むろん、望んで

いない主人公を強制的に家族として取り込むことが暴力であることに疑いはないが、この強制性を取り除いた時、自らの給与で家族を養うことを「寄生」と呼んで忌避する主人公の姿と作品の構造にミソジニー性を見出すのはある種妥当な見解である。実は主人公の男は、家族に闖入されることによって、家事労働を免除されているのだ。

「闖入者」と「友達」における大きな差異は、この家事労働の問題である。「闖入者」においては主人公の男は会社への出勤を義務付けられ給与を取り上げられた上で、家では食器洗いからお茶汲みまでの家事労働を強制される。これを拒否しようとする暴力的な制裁が待っている。対して「友達」において家事労働を担うのは概ね次女である。台所を取り切り料理から片付けまでを率先して行う次女の描写は、「闖入者」において主人公に家事労働を強制する際に使用されたセリフ「食器を洗うことなど、女の仕事だっていう、封建的な考えかたから抜けない」と併せて読むと、意識的に選択された描写であることが明らかになる。「友達」における家族内のジェンダーロールは、無意識のミソジニー性の発露というよりはむしろ意識的に選択された描写、すなわち主人公の（あるいは社会構造の）持つミソジニー性としてあえて描写された問題なのである。

さて、こうした家事労働や再生産労働は長らく「労働」の位置から排除されてきた。人間は相互にケアを受けなければ生活を成り立たせることができないのだが、ケア労働は労働として

不可視化されてきたのだ。こうしたアンペイドワークは、家庭内部に押し付けられることになる。そしてそれを正当化するために、近代社会はアンペイドワークに「余暇」や「自然」、そして「愛」という名を与えてきた。²⁷ここで「友達」における家族の大義名分が「愛」であることを思い返してみれば、作品の意図はより明瞭になる。家族の中で次女が特にこの「愛」による救済を妄信していることも、この設定においては重要だろう。「愛」などの概念で粉飾されることで、家族はその社会的機能を等閑されてきた。

ここで「愛」とされる家族機能を、社会学等の理論的蓄積に倣って「親密性」や「親密圏」と呼ぶことにする。²⁸その上で、家族機能を親密性のみに還元してしまう問題点として、上野千鶴子が述べるように、公私二元論を維持・再生産してしまい、私的領域への公的権力の不介入原則を下支えしてしまうことを確認したい。²⁹

公私二元論における私的領域への不介入の問題性とは一体どういうことだろうか。辻村みよ子は近代国家と家族の関係について、そのダブルスタンダードな緩衝材的立ち位置について以下のように述べている。

家族は、近代国民国家成立時には、一面では、国民統合の装置であったとともに、他面では、国家権力の介入を防ぐ防波堤の機能を果たした。国家対個人の二極構造の中間団

体として、一方では国家によってひとつの「公序」として法的に保護されつつ、他方では、私的領域への権力不介入を確立した公私二元論によって、二面性を持った家族が存立したといえる。³⁰⁾

このことが示しているのは、一面では「公序」として組織化された集団における極めて社会的な問題を、「私的領域」の名の下に黙殺できるということである。「個人的なことは政治的なこと」であるというスローガンが体现するように、フェミニズムは公私二元論の限界を批判的に指摘してきたが、その問題の一例として、「法は家庭に入らず」の掛け声のもとに長らく家庭内暴力に法律が介入できなかったことがあげられる。「家族法」は一九四七年以降ほぼ改正が成されず、「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律」(通称「DV防止法」)がようやく施行されたのは、二〇〇一年一〇月である。

このことは「友達」内にも批判的に描き出されている。家族内を私的領域と見なして、法や権力の介入を退けるこの構造ゆえに、主人公が警察を呼んでも問題は解決しないのだ。警察官は「そういう個人的なトラブルは、なるべく当事者どうしで解決して下さい」と述べるだけである。また同じく大家族に「寄生」されている法を司るはずの弁護士もなす術がない。家族という私的領域が、公私二元論の下に法権力の介入できない領域として保護されているからだ。

むろん主人公の男の下に闖入してくる家族たちは、男にとつての「家族ではない」。しかし、この、家族かそうでないかという地点においてこの問題を検討しても意味がないことは確かである。家族には、血縁その他の、当人の意思によらない制約によって関係性が決定され押し付けられる側面が常にあるからだ。アパートの管理人が「じつは、あんなこと、すこしも珍しいことじゃない」と述べていくのも、赤の他人が突然家族を装って闖入してくるという事例に対してではなく、縁を切りたい血縁ないしは婚姻関係の者が突然訪ねてくるというレベルの話として考えてみれば、ずいぶんありふれた話として合点がいく。

こうした事態は、近代国家が、「家族」をブラックボックス化して利用してきたことと関係しているだろう。久保田裕之は、家族の機能を「(ケア圏)・(生活圏)・(親密圏)」という三つの機能的圏域の偶発的な重なり合い」として検討することを提案している。久保田がこの三つの圏域による分析を提案するのは、家族概念を多様性の観点から拡大解釈することを批判してのことだが、それは既に見たように、家族概念を無制限に拡張することで「親密性」などに一元化された家族概念が成立し、公私二元論の隘路に家族という領域が閉じ込められてしまうからである。久保田は「ケアや生活の共同といった家族的機能は、相互に十分に分節化されないまま、親密性に従属させられてしまっている」と、アンペイドワークを親密性に取り込むことで押し付ける構造を批判する。そして親密性とケアの問題の分節

が機能していないからこそ、私的領域への公的権力の介入の是非という二律背反の問題設定から身動きが取れなくなるのである⁽³¹⁾

言い換えれば、家族の親密性にアンペイドワークを従属させる構造が、個人の自由（私的領域の保護）と国家の介入（私的領域への公的権力の介入）を対置させる議論を呼び込んだということができるだろう。「個人主義」や個人の「自由」「自律」と対立するのが、共同体の同調圧力、同質性による集団化であるという対立構造が、単純化による誤謬であることがここで明らかになる。

以上のように整理してみると、闖入してくる家族は、個人主義や自由を抑圧する相対物としての仮想敵ではない。同質性による共同体が個人を抑圧し自由を奪うという対立構図は、実は「友達」には描かれていないのだ。そして自律や自由をうたいながら、私的領域に問題解決と負担（家事労働や再生産労働、ケア労働等）を押し付けているのが近代国家である。「友達」が脅威として描き出した「家族」の姿は、近代社会が「個人主義」や「自由」「自律」という幻想を成立させてきた裏面なのである。

四、植民地主義批判としての「友達」と「消しゴムで書く」

このように、家族に集約された相矛盾する構造について検討した時、それがまさしく植民地主義とナショナリズムの問題で

あるということが見えてくるだろう。近代国家における、国家と個人の関係は、その中間団体として家族が差し挿まれることによって成立していた。そして、家族の機能と概念がブラックボックスのように覆われていることで、国家の資本主義的生産構造の問題点は弥縫されていたのである。この構図は、まさに宗主国が植民地に押し付けた搾取の機構の問題ではないだろうか。

前掲の内藤は、「闖入者」から「グローバル化時代の新たな植民地主義」を読み取ったが、ここで指摘される通り、植民地主義は国家間の対外的関係には限定されない⁽³²⁾。ここで提示される植民地主義とは、周縁から中核（地域）への資本や労働力の搾取の問題をより広くとらえる概念枠組みだと言える。こうした、グローバル化時代に見出せる、国家や国境を機軸としない植民地主義に関する議論は、植民地主義が本質的に経済的搾取であり労働力の搾取の問題、ある負担の非対称な押し付けの問題であることを浮き彫りにする。西川長夫はヘクターの国内植民地主義の議論を参照することで、「古典的な植民地概念は、国益や独立、あるいは民族自決の原則の下で行われていた内部の植民地主義的關係を隠蔽することがありえた」が「国内植民地主義の普遍性」が「国民統合は植民地主義的原理によって行われたということ」を明らかにすると述べている⁽³³⁾。それはすなわち国民国家概念の成立過程において、国民国家の枠組みがブラックボックス化することによってその内部に存在する植民地

支配を隠蔽したことを示している。国民国家や家族において検討しなければならないのは、同質性よりも、同質性を装って差異を利用する搾取構造であり、様々な差異の平準化に見せかけた格差の拡大こそが問題なのである。

そしてこの国家内外にも存在する植民地主義的搾取の機構は、家族概念をも巧妙に利用する。家事労働を免除されている主人公の男は、そこに労働の負荷が発生していることに鈍感である。しかし家事労働や再生産労働、ケアに関わる活動は、社会において確実に存在し、誰かがいずれかの形で担っている機能である。主人公の男はおそらく、家族が闖入してくるまで、そのケアに関わる部分を誰かに外注していたのだろう。それは婚約者かもしれないし、低賃金労働者かもしれない。作中に描かれぬ主人公の血縁関係にある誰かかもしれない。あるいは、家族や親族の介護等の負担や不安を退けて、主人公は現在、自由と思えるような一人暮らしができているのかもしれない。家族から逃れることを自由と見なす主人公は、自らが世間によって多くのケアや恩恵を受けていることに無自覚であるとも捉えられる。

安部は「友達」について「疑似共同体のシンボル（明治百年、紀元節の復活、等々）に対する、われわれの内部の弱さと盲点」を暴く作品だと言っていた。「疑似共同体のシンボル」に依存せざるを得ない弱さを、人間が生存においてケアを必要としてしまうことであると位置づければ、その盲点とは、ケアの必要

性をアンペイドワークとして社会が不可視化してきたことそれ自体ということができるだろう。そしてそれゆえ、親密圏内部に生じる暴力や摩擦は不可視化される。男の受ける被害は、こうした中で発生している。国家と個人、あるいは集団と個人の単線的な関係に見えていたものが複雑に絡み合っていることが明らかにする時、植民者と被植民者の二者で記述されていたはずの加害／被害の関係はさらに複雑になる。植民地主義の問題は国家間の関係として記述でなくなる。

そして、様々な差異の平準化に見せかけた格差の拡大を利用し搾取する構造、言い換えれば搾取を隠蔽する構造が、植民地主義的な制度なのだとしたら、ここにおいて、加害性についてナショナリズムを排した再記述が可能になる。非対称性に無自覚であること、個人の自由や自律なるものが非対称性を利用した搾取構造の上に成り立っているに過ぎないことへの鈍感さ、それが、植民者としての安部が持っていた加害性なのである。

振り返れば安部は、植民地における自身の加害性を「その土地の人間を人間としてよりも、植物や風景のように見るということ」だと言っていた。それは、植民者としての安部が被植民者の人々と「出会い損ねた」ことであった。これは国家間の対外関係に置いて記述可能な植民地に限った話ではない。「友達」における主人公も、その他の登場人物たちも、おそらくその鈍感さゆえに多くの「出会い損ね」を積み重ねている。そして安部の実感によれば、「出会い損ね」は、「相手を見失うばかりで

なく、同時に自分をも見失っている」ことになる。³⁴⁾

ここに至つてようやく、本稿は「消しゴムで書く」こと、経歴について語れなくなることの意味を再度検討できる。それは、他者との「出会い損ね」によつて「自分をも見失っている」という安部の言及が、自身の加害性ゆえの自己表象の不可能性の問題として、改めて浮上してくるからだ。

安部はエッセイ「消しゴムで書く」において、スタインベルグの漫画に言及している。その漫画は肖像画が「自分で自分を描いている」というものであり、これを指して安部は「生活の作品化への痛烈な諷刺」と位置付ける。いわば自己表象とは「描くことを通じて、自己の生活を抹消している」ことなのだ。ゆえに安部は「消しゴムで書く」ことを希求する。つまり、自己表象によつて自己を抹消することそれ自体を否定しようというのが、安部の態度であると言えるだろう。

安部は自己表象の不可能性に抗おうとして「消しゴムで書く」。もちろん、こちらにもまた不可能な行為であるのだが、それをやめられないのは、自己の存在を負圧として自覚しているためである。

ぼく個人に関していえば、現在ぼくを引裂こうとしている、その負圧は、他人という存在の一語につきるかもしれない。考えてみると、ぼくの最近の作品のテーマは、すべてその「他人」にかかわっているようだ。他人との関係で、

日常的な通路を超えたものに辿りつかないかぎり、ぼくは消しゴムの手を休めることが出来そうにない。³⁵⁾

他者に「出会い損ね」たことによる加害性。それをナシヨナリズムによる枠組みを排した上でも自覚的に引き受けた時、「相手を見失うばかりでなく、同時に自分をも見失っている」という言葉は、民族や国民を対象にした限定的な自戒に留まらなくなる。自己表象の本質的な不可能性を自覚しながら、自分のことについて語る言葉を持たないことそれ自体が自らの加害性と結びついていくと考えた時、おそらく語らないという選択肢は取れなかっただろう。だから「消しゴムで書く」という不可能性を織り込んだ表現を持ち出すことで、自己表象自体を戯画化しながら、安部は表象を重ね続けた。過去を固定化して描写するような方法——例えば自身の経歴についてはできるだけ沈黙することを選んだ。それは、書くという行為の動きの中に、かろうじて痕跡が発見されることを望むような態度である。

しかしこうした沈黙と書き換えという葛藤と実践の中に、確かにナシヨナリズムに収斂しない加害性の引き受けと植民地主義批判を看取することができる。安部は、「出会い損ね」る他者の問題を、国家間や民族間のみならず家族とその構造にまで敷衍することで、植民地主義の問題を再提示してみせたのだ。

注

(1) それぞれ、「年譜」「新鋭文学叢書」一九六〇年十二月、「年譜」『新日本文学全集』一九六四年二月、「安部公房年譜」『芥川賞作家シリーズ』「おまえにも罪がある」一九六五年二月、「略年譜」『われらの文学』一九六六年二月。

(2) 安部公房「略年譜」『われらの文学』一九六六年二月。

(3) 鳥羽耕史『ミネルヴァ日本評伝選 安部公房』ミネルヴァ書房、二〇二四年七月。なお、安部公房「消しゴムで書く」は『大阪労演』(第二〇二号、一九六六年二月)が初出であり、加筆修正後「消しゴムで書く」と題され『われらの文学』(前掲)に再掲された。

(4) 鳥羽耕史『ミネルヴァ日本評伝選 安部公房』(前掲)。

(5) 安部公房「日本共産党は世界の孤児だ―東ヨーロッパで考えたこと」『知性』一九五六年九月、および、「日本共産党は世界の孤児だ―続 東ヨーロッパで考えたこと」『知性』一九五六年一〇月。

(6) 木村陽子『安部公房とはだれか』笠間書院、二〇一三年五月。

(7) 後述するが、こうした作家イメージの形成を指摘し批判的に検討した研究として、坂堅太『安部公房と日本』(和泉書院、二〇一六年一〇月)がある。また、鳥羽耕史『運動体・安部公房』(一葉社、二〇〇七年五月)も一九五〇年代の安部の政治的な活動を取り上げることで安部の従来のイメージを刷新している。

(8) 鳥羽耕史『ミネルヴァ日本評伝選 安部公房』(前掲)。なお、『終わりし道の標べに』は真善美社より一九四八年一〇月に刊行されたデビュー作であり、一九六五年十二月に冬樹社より再刊行された際に全面的な改稿が行われている。

(9) 「リテラリー・アダプテーション」という用語選択については、木村陽子『安部公房とはだれか』(前掲)による。

(10) 坂堅太『安部公房と日本』(前掲)。

(11) 鳥羽耕史『ミネルヴァ日本評伝選 安部公房』(前掲)。

(12) 安部公房「瀋陽十七年」『旅』日本交通社、一九五四年二月。

(13) 小林勝「あとがき」『朝鮮・明治五十二年』(新興書房、一九七一年五月)において小林は、生まれ育った朝鮮に対する郷愁を仄めかしながら、「私の内なる懐しさを拒否する」と宣言している。(引用は『小林勝作品集5』白川書院、一九七六年三月。)

(14) 原佑介『禁じられた郷愁』新幹社、二〇一九年三月。

(15) 坂堅太『安部公房と日本』(前掲)。

(16) 安部公房「安部公房年譜」『芥川賞作家シリーズ』「おまえにも罪がある」(前掲)。

(17) 安部公房「(作者附記)『文芸』一九六七年三月号。

(18) 山田博光「安部公房」『社会文学』一九九七年六月。なお同様の指摘に、田中裕之「比喩と変形」『梅花女子大学文学部紀要 比較文化編』二〇〇三年十二月)がある。

(19) 黒井千次「夜と風」『新潮』一九九三年四月。

(20) 石沢秀二「友達 闖入する友達の恐ろしさ」『国文学 解釈と教材の研究』一九七二年九月。

(21) 友田義行「地下茎状の原作」『文学』二〇一四年一月。

(22) 内藤由直「グローバル化時代の「闖入者」『フェンスレス』二〇一六年九月。なおここでの「グローバル化時代の新たな植民地主義」

とは、マイケル・ヘクターの国内植民地主義 (Michael Hechter: Internal Colonialism: The Celtic Fringe in British National Development (1975)) や、西川長夫の「(新) 植民地主義」(西川長夫『新』植民地主義論』平凡社、二〇〇六年八月) で提示された議論を指している。詳細については後述する。

(23) 闖入者家族と主人公に同質性があること、および闖入者家族がその内部に封建的な振る舞いと論理を内在していることは拙稿「(闖入者) 論」『もぐら通信』二〇一三年一月) でも指摘している。

(24) 安部公房「友達——「闖入者」より」『安部公房全集20』新潮社、一九九九年五月。一九六七年二月頃に「友達」の原稿と共に劇団青年座に渡されたものと推測される。むろんこの言及が事後的なものであることには留意すべきであろう。それゆえに、この言及を当時の安部の意図を証明するものとして無批判に信用することとは避けたい。

(25) 安部公房「友達——「闖入者」より」(前掲)。なお、安部は疑似共同体のシンボルとして、象徴天皇制や隣人愛、民族的自覚を挙げている。

(26) 北村紗衣「孤独とミソジニー」『比較文学・文化論集』二〇一〇年三月。

(27) 江原由美子「自己決定とジェンダー」水野紀子編『ジェンダー法・政策研究叢書6 家族』東北大学出版会、二〇〇六年十一月。

(28) 例えば、斎藤純一『思考のフロンティア 公共性』岩波書店、

二〇〇〇年五月等を参照のこと。

(29) 上野千鶴子「家族の臨界」牟田和恵編『家族を超える社会学』新曜社、二〇〇九年十二月。

(30) 辻村みよ子「家族・国家・ジェンダーをめぐる比較憲法的考察」水野紀子編『ジェンダー法・政策研究叢書6 家族』(前掲)。

(31) 久保田裕之「家族社会学における家族機能論の再定位」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』二〇一一年三月。

(32) 内藤由直「グローバル化時代の「闖入者」」(前掲)。

(33) 西川長夫「(新) 植民地主義について」『立命館言語文化研究』二〇〇七年九月。

(34) 安部公房「瀋陽十七年」(前掲)。

(35) 安部公房「消しゴムで書く」『われらの文学』(前掲)。

附記 安部公房の作品やエッセイの引用は全て、『安部公房全集』(新潮社) に拠った。